

超サイヤ人

桂ヒナギク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アクア星に漂流したサイヤ人のキヤルロット。彼女は悟空の双子の妹だった。そんな彼女の元に、サイヤ人の男が二人、訪ねてくる。

男たちは「カカロット」を倒すと言っていたが……。

目次

| | | |
|-----|------------------------|----|
| 1. | 出発 | 1 |
| 2. | 地球 | 5 |
| 3. | 伝説の変身 | 10 |
| 4. | 逮捕された? | 16 |
| 5. | そんなに弱くてよく用心棒と名乗れたものだ…… | 20 |
| 6. | フリーザの行方 | 24 |
| 7. | ナメック星 | 28 |
| 8. | 特戦隊 | 32 |
| 9. | フリーザ | 38 |
| 10. | フリーザの最期 | 45 |
| 11. | 乗っ取られたキャラルロット | |

| | | |
|-----|----------------------------|----|
| | | 52 |
| 12. | 悟空帰る。地球はみんなオラの敵 | |
| 13. | 怒涛の反撃 | 64 |
| 14. | ベビー昇天。未来からの訪問者現る | 69 |
| 15. | 覚醒せよ！超サイヤ人！ | 75 |
| 16. | セル登場 | 80 |
| 17. | キャラルロットが心臓病？超サイヤ人になったベジータ！ | 86 |
| 18. | キャラルロットよ、死んでしまうとは情けない | 90 |
| 19. | 帰ってきたキャラルロット セルの | |

消滅

20.

あの世—武道会

101 96

1. 出発

二十年前。

彼女の名は、キヤルロツト。何を隠そう、カカロツト、もとい孫そん悟空ごくうの双子の妹なのだが、そのことを知る人物は誰一人として存在しなかった。そう、両親を除いては……。

フリーザの手に寄って惑星ベジータが崩壊し、サイヤ人の赤ん坊である悟空を乗せたポツドの他に、もう一台のポツドが地球とは別の惑星へと向かって飛び出していく。

向かった先は、水棲生物が暮らすアクア星。

ポツドの落下地点に、クレーターが出来上がった。

アクア星の天体観測員が、ポツドの確認に来る。

「見てくれ。赤ん坊だ」

「うん？ 尻尾が生えてるぞ」

天体観測院はポツドから赤ん坊を抱き上げる。

赤ん坊は元気に鳴き声を上げていた。

現在。

天から降ってきた少女、キヤルロットは、端正な顔立ちをした女性に成長していた。長閑なアクア星では、地球のように宇宙人に狙われることもなく、彼女は平和な時を過ごしていた。

だが、それでもサイヤ人としての血が騒ぐのか、強さを求めて日々鍛錬たんれんに励んでいた。「ウオタラやい。修行もそれぐらいにして、食事にもしないかね?」
ウオタラ、というのは、アクア星でのキヤルロットの名前である。

「じいや」

キヤルロットは老人の方を振り返る。

老人の名はスイミ。アクア星の長老である。

刹那、二つの隕石かなにかが上空を通過する。

「あれは……」

スイミが昔のことを思い出す。

「じいや?」

「あれはお前が乗ってきた宇宙船じゃないのか?」

二つのポッドは平野に大きな音を立てて落下する。

クレーターが出来上がった。

ポッドから、尻尾を生やした男が二人現れた。

キヤルロツトは現場へ向かった。

「お前がキヤルロツトだな？」

「キヤルロツト？」

「お前は俺たちと同じサイヤ人。共に来い」

「サイヤ人？」

「そうだ。お前は戦闘民族サイヤ人だ」

「俺たちはこれから地球という星を目指す。そこで、カカロツトを倒す」

「カカロツト？」

キヤルロツトの脳裏に、声が過よぎる。

大きくなったら、カカロツトの助けになってやってくれ。

そこへスイミがやってくる。

「お客人かね？」

「なんだ貴様は？」

「わしはこの星の長老じゃ」

「ほおう？」

「この女は俺たちと同じサイヤ人だ。連れて行きたい」

「よかったじゃないか、ウオタラよ」

「え？」

「この方たちはお前さんのお仲間。一緒に行ってあげなされ」

「でもじいやは育ての親。寂しいんじや？」

「いいんじやよ。わしやお前さんを仲間の元へ返したかったんじや」

「じいや……」

キヤルロツトはスイミが保管していたポッドの元へやつてくる。

「それじゃ、行ってくるね」

キヤルロツトのポッドが飛び立った。

今、三人を乗せたポッドが、地球を目指す。

2. 地球

「おい、キャロット」

キャロットのポッドに、禿頭の乗る宇宙船から通信が入る。

「なに？」

「さっきお前の戦闘力を測ったんだがな、たったの一だぞ？ そんなんでカカロットと戦えるのか？」

「その前にカカロットって誰？」

「ターレスってやつに聞いたんだがな、お前の双子の兄らしい。そしてその兄の兄、つまりお前の兄でもあるラディッツがカカロットに殺されたんだ。俺たちは裏切り者のカカロットを始末するために地球という星へ向かってるんだ」

「へえ。あ、そういえばあなたの名前は？」

「うん？ まだ名乗ってなかったか。ナツパだ。もう一人の方はベジータって名だ」

「ナツパさんにベジータさん」

「そこへベジータが割って入る。」

「おい、キャロット！」

「うん？」

「その呼び方はやめろ！ 虫むし睡ずが走る！」

「ごめん。でもなんて呼べば？」

「同じサイヤ人なんだ。呼び捨てで構わん」

「そしたらナツパもナツパでいい？」

「構わないぜ」

キヤルロットの視界に、美しい惑星の姿が飛び込んできた。

「あれは？」

「どうやらあれが地球のようだぜ」

三人のポッドが地球の市街地に着陸する。

ポッドから出てくる三人。

「意外と軽いわね」

「アクアもこの五倍くらいはあったからな」

「ようし、ひと暴れするか」

ナツパの技が、市街地を消し炭に変える。

「ちよ！ カカロットを倒すんでしょ!?! 地球は関係ないじゃん！」

「カカロットの悔しがる姿が見たいもんでよ」

「ピピ！」

ナツパが片目に装着しているスカウターを起動する。

「いるぞ。近くに大きな戦闘力を持ったやつらが」

「ようし、行くか」

ベジータとナツパが飛び立つ。

「待つてよ！」

キャロットも舞空術で二人を追う。

草原の一角に、悟空の息子の悟飯、ナメック星人のピッコロ、他数名が集まっていた。

「来るぞー！」

と、ピッコロが言うと、一同は身構えた。

そこに、三人のサイヤ人が降り立つ。

「待つていたぞ、サイヤ人ども」

と、ピッコロ。

「ナメック星人か。お前だな？ カカロットと組んでラディッツを殺したのは」

「ふん！」

「まあ、いい。いずれお前も同じ運命を辿るのだからな」

「あれ？」

悟飯が伝え聞いていた人数と違うことに気づく。

「ピッコロさん、サイヤ人は二人でしたよね？」

「ああ、確かにそうだ」

「でも、三人いません？」

「どうでもいい。まとめてやっつけるだけだ」

「随分と威勢がいいのね」

「ふん。さつさとかかってこい」

「まあ、慌てるな。俺たちはカカロットを倒しに来たんだ。お前たちには興味はない」

「カカロット？ 悟空のことか？」

「悟空？ そいつがカカロットなんだな？」

「お父さんはお前たちになんかやられないもんね！」

「お前は……、そうか」

ベジータは何かを思いつく。

「ナツパ。あのチビの相手をしてやれ。カカロットに会うまでの余興だ」

「いいぜ」

「気をつけろ悟飯！」

ナツパは悟飯と戦うが、彼では敵にすらならなかった。

「悟飯！」

死にかけの悟飯に、トドメを刺そうと光線を放つナツパ。

ピッコロが、悟飯を庇い、光線技を身に受けた。

「うおおああああ！」

「ピッコロさーん！」

倒れるピッコロ。

「に……逃げろ……悟飯……」

「ピッコロさん？」

ピッコロは息絶えてしまった。

「ピッコロさん！ ピッコロさん！」

「ピッコロ！」

と、禿頭の地球人。

（禿頭が二人……）

と、内心思うキャロットだった。

3. 伝説の変身

「貴様、よくもやりやがったな！」

ヤムチャという地球人がナツパに突進した。

ブン！

ヤムチャの拳がナツパの顔面にめり込むが、大して効いていないのか、微動だにしない。

「ぶん」

ナツパはヤムチャの手首を掴み、後方へ放り投げた。

「死ねえええええ！」

光線技がヤムチャにクリーンヒットし、大ダメージを受けた彼は地面に伏した。

クリリンという鼻のない男が、悟飯に言う。

「悟飯、悟空が来るまで、なんとか時間を稼ぐぞ」

「で、でも僕、もうへロへロで戦えません」

クリリンが気を悟飯に分け与えた。

「ありがとうございます！」

悟飯は三人を睨め付ける。

「赦さないぞ、お前たち！」

「ふん。お前たちの相手はこいつらにしてもらおう」

ナツパが地面にタネのようなものを撒いた。

タネからサイバイマンが育つ。

「なんだこいつら？」

悟飯とクリリン、そして天津飯という三つ目人が応戦。ボロボロになりながらもなんとか撃退に成功した。

「もうボロボロだな。そろそろあっちへ行くか？」

と、ナツパ。

ナツパの背後からチャオズという小さな男の子が張り付く。

「天さん、ごめんなさい」

「チャオズ、やめろ！」

だが、チャオズは自爆してナツパを巻き込んだ。

しかし、それでもナツパはかすり傷を負うだけで、ピンピンしていた。

「チャオズー！」

「びつくりさせやがって」

「チャオズの仇！」

天津飯が気功砲を放つ。

「波——！」

だが反撃に遭い、天津飯も息絶える。

「そんな、天津飯まで！」

そこへ、悟空が駆けつける。

「ピッコロ……、ヤムチャ……、天津飯。それにチャオズまで」

「お前がカカロットか。待ってる。今、その二人が死ぬところを拝ませてやる」

「そんなこと、させねえぞ！」

界王拳！——悟空は目にも留まらぬ速度で、襲い掛かろうとしたナツパを戦闘不能に

陥れた。

「ぐ……」

片手で持ち上げていたナツパを放り投げる。

「悟空、お前なにしたんだ？」

「界王拳だ」

「界王拳？」

悟空が二人を見る。

「おめえたち、さっさと地球から出てけ」

無言でベジータがナツパの手を掴む。

「べ、ベジータ……」

ベジータはナツパを上空に放り投げると、光線を放って粉碎した。

「足手まといは必要ない」

「ベジータ……」

と、キヤルロット。

「やめだカカロット。今すぐ俺と戦え！」

「待ってベジータ」

「なんだ、キヤルロット?」

「あんたじゃ、勝てないよ」

「戦闘力が一の貴様に言われる筋合いはない」

「一かどうか、見てればわかるわ」

「いいだろう」

ベジータはスカウターでキヤルロットの戦闘力を測る。

「カカロット、あんたの相手は私よ」

「オラ、女は殴りたくねえな」

「私は殴るよ」

キヤルロットが気を溜め始める。

「はあああああ!」

上がり始めたエネルギーはどんどん昇り、スカウターが計測不能となつて木っ端微塵になる。

「なに!?!」

「はあああああ!」

キヤルロットの長い黒髪が、金色に変色し、同色のオーラをその身に纏う。

「なんだ、その変わりようは? まさか、超サイヤ人なのか!?!」

ベジータは驚き戸惑う。ちよつと前に会ったばかりの女が、こうもあつさり超サイヤ人へと変身したのだから。

「かかつてきな!」

「界王拳!」

悟空がキヤルロットの懐に飛び込んだ。

キヤルロットを拳で乱打する悟空。

しかし、てんで効いていない様子のキヤルロット。

「ふん」

デコピンで悟空を吹っ飛ばす。

「うえああああ！」

後方に吹っ飛ばされた悟空は、岩壁にめり込んだ。

「あ……」

やりすぎた、そう思うキャロットだった。

4. 逮捕された？

キヤルロットは超サイヤ人状態を解除し、元の黒髪の可愛い女性に戻った。

「キヤルロット、今のはどうやったんだ？」

ベジータが疑問符を浮かべる。

「わかんない。ただ、戦闘力を上げていたらああなつて」

「予定が変わった。惑星フリーザへ行くぞ。お前がいればフリーザなんぞ取るに足らん相手だ」

「フリーザ？」

ベジータはポッドをリモコン操作で呼び出し、中に乗り込んだ。

「ちよつと待てよ。まだ勝負はついてねえじゃねえか……」

と、悟空がやって来る。

「カカロット、俺の目的はお前よりフリーザという恐ろしい相手を倒すことだ。そうだ。お前に知恵を与えてやろう。ピッコロとかいうやつのお生地であるナメック星にでも行けば、ドラゴンボールで死んだやつが蘇るんじゃないか？」

ハッチが閉まり、ポッドがゆっくり上昇する。

「待ってよ」

キヤルロットもリモコンでポッドを呼び、ベジータの後を追う。

二人を乗せたポッドは、地球より遙か彼方に位置する、惑星フリーザへ向かって飛び立った。

「ねえ、ベジータ？ フリーザって何者なの？」

「フリーザか。その名を聞くだけでも反吐へどが出るぜ」

「フリーザって強いのか？」

「途轍もなくない。そうでなきゃフリーザ軍の軍長などできんだらう」

「へえ」

ググググ。

「お腹なっちゃった」

「腹が減ったのか？ どこかの星に寄って何か食べるか」

二人は近くに見つけた惑星へポッドを着陸させる。

ポッドを降り、辺りを散策する。

「クンカクンカ」

キヤルロットは美味しそうな香に気づく。

「ベジータ、あそこお店じゃない？」

二人はレストランへ入った。

「いらつしやいませ。お好きな席へどうぞ」

二人は適当に座る。

ウェイターがお冷とお品書きを置く。

メニューを開いてみるキヤルロットだが、商品に金額が書かれていなかった。

「すいません、金額が書いてありませんが」

「申し訳ありません。リーズナブルな金額でご用意させていただいておりますので、お

好きなだけお召し上がり下さい」

「じゃあありつたけの料理持つてきて」

「かしこまりました」

キヤルロットたちの前に、大量の料理が運び込まれる。

二人は料理を貪り^{むさぼ}尽くし、店の全メニューが在庫切れになった。

「百那^{なゆた}由他ガメツツになります」

「ガメツツ？ 私たちこの星のお金ないんだけど？」

「なんですつて？ お客さんたち、無銭飲食ですか？ いけませんなあ、そんなこと」

ウェイターが通信端末を取り出し、警察を呼んだ。

「こいつら無銭飲食をしようとしてまして」

「それはいただけじゃないな。署まで来い」

「だって、ベジータ。どうする？」

「行つてやろうじゃないか」

「何か企んでるね？」

「ふん」

ニヤリと笑みを浮かべるベジータである。

二人は警察に連れられ、署まで同行する。

取調室に入れられる二人。

5. そんなに弱くてよく用心棒と名乗れたものだ……

取調室。

「金もないのになぜ店に入った？」

「腹が減ってたから」

「金がないなら食うんじゃない。それとも、無銭飲食が目的なのか？」

「いや、決してそんなことは。ていうか、那由他つて高すぎだと思っただろうよ？」

「反省の色が見えないな。お前たちにはお仕置きをしてやる」

ベジータが取調官に気弾をぶつけて消し炭に変えた。

「ちよつと何やってんのよ!？」

そこへ、大勢の警察官が集まってくる。

「貴様、よくも！」

「捕らえろ！」

「あーあ、知らない」

二人は目にも留まらぬ速度で警察官を薙ぎ倒し、署から脱出する。

そしてその足でポッドの着地点まで向かうが。

「あれ？」

「ポッドはどこに行つたんだ？」

「あー！」

キヤルロットがポッドを乗せて移動するトラックを見つけた。

「追うぞー！」

ベジータが飛び立つ。

キヤルロットもポッドを追い、どこかの宮殿へと辿り着く。

宮殿の王室で、ゴウ・キヤーがお金を数えている。

そこに慌てた様子の兵隊。

「キヤー様、大変です！ 我が警察隊が壊滅しました！」

「なんですって？」

「警察隊が押さえた賊の写真です！」

兵隊がキヤルロットとベジータの写真を見せる。

「総力を上げて捕まえるんだ！」

「その必要はないわー！」

と、そこにキヤルロットとベジータが現れる。

「衛兵は何をしてるんだ!？」

「衛兵は全員殺させてもらった」

「なんですって!？」

「命が惜しくば俺たちの宇宙船を返すんだな」

ゴウが逃げ出す。

「待て！」

二人が追おうとすると、迷彩模様の体を持った男が現れた。

「なによあんた？」

「ゴウの用心棒をしているレジックだ」

「レジック先生、そんなやつやつつけておしまい！」

「ふん」

レジックがキヤルロットに襲いかかる。

キヤルロットはレジックの乱打を全てかわし、カウンターで怯ませる。

「貴様、サイヤ人か？」

「ご名答」

「貴様のパワーはその程度か？ まだ力を隠しているのだろうか？ 本気でかかってこ

い」

「いいわ。見せてあげる」

キャルロットは超サイヤ人に変身する。

それを見ていたベジータは、ショックを受けていた。

自分がエリートサイヤ人のはずが、何処の馬の骨とも知らぬ下級のサイヤ人が、超サイヤ人になってみせるのだから。

自然と怒りが込み上げてくるベジータ。

自分がナンバーワンだとばかり思っていたのに、一気にその座から引きずり下ろされたような気分だった。

そうこうしているうちに、キャルロットの勝利で戦闘は終わっていた。

「大したことないわね。それでよく用心棒を買って出れたものね」

「くっ……!」

レジックは去っていった。

「さて、ゴウとやら」

「ひえ!」

怯えて震えるゴウ・キヤー。

「宇宙船、返してくれるよね? それから、お金にがめついのも控えてほしいわね」

「はい、はい!」

宇宙船を取り返した二人は、惑星フリーザを指すのだった。

6. フリーザの行方

惑星フリーザに到着するキヤルロットとベジータ。

「おい、フリーザ様はいるか？」

「フリーザ様なら今さっきナメック星へ向かわれた」

「なにい!？」

あの話を通信機能で聞いていたのか、フリーザはナメック星へ発ったばかりだった。

「ぐずぐずしてはおれん! 行くぞキヤルロット!」

キヤルロットとベジータはフリーザを追うべく、ナメック星へと急いだ。

一方、一足先に、悟飯とクリリン、ブルマがナメック星に到着していた。

悟空も後からブリーフ博士の作った宇宙船で向かうということだった。というのも、

悟空は重力コントロール装置で修行をしたいからとのこと、三人が邪魔になるからだった。

「ブルマさんはここにいて下さい。洞窟もあるし、ここにいればなんか遭ったときに逃げ込めるので」

「そうね」

「うん？」

悟飯がなにかに気づく。

「どうした、悟飯？」

「今、気が消えたんです」

「消えた？ またまた。こんなところにベジータがいるってのか？ ベジータはフリー

ザを倒すとか言っただけで飛び立った。こんなところにベジータがいるとは思えないけどな」

「違うんです。ベジータより、悪意に満ちた気が別の気を消したんです」

「ベジータよりやばいやつがいるのかよ」

「僕、ちよつと行ってみます」

「俺も行くよ」

悟飯とクリリンが偵察に出る。

崖の上から、集落を見下ろす二人。

そこには、不思議な乗り物に乗った異星人ことフリーザと、側近のドドリアとザーボンがいる。そして、複数のナメック星人の死体の中に残り残されたデンデという少年が一人。

ドドリアとザーボンに限っては、大きなドラゴンボールを抱えていた。

「大きいですね」

「ああ、あれがナメック星のドラゴンボール……。けど、あいつらはなんなんだ？」

「あいつですよ、クリリンさん。僕が感じた気は」

二人は一同の様子に集中する。

「さて、このドラゴンボールも手に入ったことだし、最後にガキを消しましょうかね」

デンドエは怯えて震えている。

フリーザが、指先に気を溜める。

「やめろー！」

「悟飯!？」

悟飯がデンドエを庇うように躍り出る。

クリリンも後を追った。

「おや、なんですか？ 君たちは」

「この人たちを殺つたのはお前だな？」

「いけすかない子たちですねえ。ドドリアさん、やっておしまいなさい」

ドドリアが悟飯たちに迫る。

「逃げるぞー！」

悟飯とクリリンがデンドエを連れてその場を離れる。

「追うんですよ！」

三人をドドリアが追う。

「やばい、追いつかれる！」

「二手に分かれましょう！」

「わかった！ 俺はこいつを連れて逃げる！」

悟飯とクリリンが分かれる。

ドドリアは立ち止まり、どちらを追っていいかわからずに戸惑っている。

その頃、悟空はブリーフ博士の宇宙船で修行をしていた。

重力を少しずつ上げ、体に慣れさせていく。

一方、キャルロットとベジータは、ナメック星に接近しつつあった。

7. ナメツク星

ナメツク星。

ドドリアを撒いた悟飯は、茂みに身を潜めていた。

ドドリアが悟飯を探しながら通り過ぎていく。

悟飯は急いでブルマの元へ戻った。

そこには、クリリンとデンデもいた。

「撒いたのか」

「はい、なんとか」

そこへ、小さな気が二つ迫ってくる。

「……………!?!」

「ブルマさん、隠れて!」

「え?」

四人は洞窟の中に隠れる。

そこにフリーザ軍の一味がやってくる。

「確かにこの辺で高い数値が出ただけだなあ」

「スカウターの故障なんじゃねえか？」

「だったらいいけどよ。正直、びびっちゃまったぜ」

悟飯が小声で言う。

「あいつらなら僕たちでも倒せそうですよ」

「やるか」

悟飯とクリリンが一味の前に飛び出す。

「なんだお前たち？」

悟飯とクリリンは一味に襲いかかり、あっという間に倒してしまふ。

一方、ナメック星の僻地へきちに、キヤルロットとベジータのポッドが着陸していた。

気を探るキヤルロット。

（大きな気が三つ。一つは移動してる？）

「なにしてる？」

「うん？ 戦闘力を探ってたの」

「戦闘力を探る？」

「集中すれば気配だけで居場所がわかるわよ」

「なんだと？」

「……？ 何か来る」

刹那、目を血張らせたドドリアが現れた。

「誰かと思えばベジータ!」

振り返るベジータ。

「ほおう。ドドリアさんじゃないか。何しにきた?」

「ベジータ、お前は地球で裏切り者を始末するはずだったはずだ」

「予定が変わったんだ」

「予定? そうか、フリーザ様をやっつけるとか、片腹痛いわ」

イラついたベジータは気弾を放った。

「うわ!」

慌ててかわすドドリア。

「何をするんだベジータ!」

「ふん。ガタガタ言ってる場合か? こっちには超サイヤ人がいるんだ」

ベジータはそう言って、キャルロットを見る。

「私?」

「キャルロットは超サイヤ人に変身できるんだ。ドドリア、貴様など一溜まりもないはずだ」

「待つて。戦う理由がないんだけど?」

「残念だったなベジータ。その可愛い女は戦う気がないようだぞ」

「まあ、お前など俺の手でも十分だがな」

「なにを!?!」

ドドリアがベジータに攻撃をしかけた。

ベジータは攻撃をかわし、カウンターで怯ませ、追い討ちの乱打を浴びせる。

殺られる、そう思ったドドリアは逃げ出そうとする。

「逃がすか!」

「ま、待てベジータ! そうだ! いいことを教えてやる!」

「ほおう?」

「お前たちサイヤ人の惑星ベジータは隕石の衝突で滅んだんじゃない。フリーザ様自らが破壊したんだ」

「なに!?!」

怒り狂ったベジータが光線でドドリアを消し炭に変える。

「うわああああ!」

悲鳴を上げながら最期を迎えるドドリアである。

8. 特戦隊

フリーザの横で、ザーボンのスカウターに表示されていたドドリアの戦闘力が消滅した。

「フリーザ様、ドドリアがやられたようです」

「ベジータですか？ 放っておきなさい」

「それが……」

「なんですか？ 言いなさい」

「はい。ベジータは超サイヤ人を味方につけたようです」

「超サイヤ人ですか。そんな都市伝説、私は信じませんがね」

「しかし、警戒は必要かと」

「ザーボンさん」

「はい？」

「ドドリアさんの仇を取るんです」

「仇、ですか？」

「ええ。せめてもの手向けと思わせてね」

「わかりました」

ザーボンはドラゴンボールを置き、キャルロットたちのいるところへ移動した。

「来ると思っていたよ、ザーボン」

「ふん。サイヤ人風情ふぜいがなにを言う?」

「貴様もドドリアと同じ道を辿らせてやろう」

「威勢だけはいいんだな、ベジータ」

「ふん。威勢だけではないところを見せてやる」

キャルロットはブルマたちのいる洞窟へと気を探りながら目指す。

一方、悟飯とクリリンは接近してくるキャルロットの気を察知していた。

「この気は……?」

「悟空のに似てるな」

その気の持ち主が姿を現す。

「サイヤ人の女だ!」

身構える二人。

「待って。戦意はないわ」

姿勢を正す二人。

「あなたたちに折り入ってお願いがあるんだ。ドラゴンボール探しを手伝ってくれない

かしら?」

「だ、誰がお前らなんかに!」

「クリリンさん、この人そんなに悪い人じゃないです。僕にはわかるんです」

「だけども……」

遠くで、ザーボンの気が消滅した。

「クリリンさん、大きな気が一つ消えましたよ」

「きつとベジータがやったんだわ」

「ベジータが来てるのか!」

「フリーザってのを追ってね」

「フリーザって……」

悟飯とクリリンがそれぞれ乗り物に乗った異星人を思い浮かべた。

「あいつがフリーザなのか?」

「だとしても僕たちには足元にも及びませんよ。だったらまだドラゴンボールを回収し

ていた方がいいんじゃないですか?」

「だな。俺、ブルマさんからリーダー借りてくるよ」

クリリンは洞窟へと入っていった。

「ねえ、お姉さん」

「うん？」

「お姉さん、少しお父さんに似てる気がします」

「妹だしね」

「え？　じゃあ僕は甥っ子か」

クリリンが戻ってくる。

「リーダー借りてきたぞ」

ドラゴンリーダーをチェックするクリリン。

「あっち……は？」

「あつちはあいつらがいた場所じゃないですか？」

「そ、そうだった！　つーことは、このまとまってるのはあとでどうにかして回収しよ

う。今はあつちだ」

三人はリーダーが表示する場所へ移動した。

三手にわかれてドラゴンボールを探す。

「あつた！」

キヤルロツトがドラゴンボールを見つけた。

「あと四つ」

三人は次の場所へ向かい、五つのドラゴンボールを全て見つけ出した。

そこへ、ベジータがやってくる。

「あ、ベジータ。ちょうど五つ集まったところだよ。あと二つはたぶんフリーザのところにあるかも」

「ではその五つもフリーザ様に献上させてもらおう」

「……………」

違和感を覚えるキャロット。

「隊長！」

そこへ白髪を生やした赤い体の男、ジースが現れる。

更に続々とギニュー特戦隊のメンバーが集まってくる。

「お前、ベジータじゃないね」

「その通り！ 俺様は、ギニュー特戦隊隊長のギニュー様だ！ ベジータの体は俺様がいただいた！」

そこへ、二本の角が生えた紫色の男がボロボロの姿で現れる。

「ギニュー……………返せ……………」

「ベジータなの!?!」

「ああ、この俺がベジータだ」

キャロットはベジータの姿をしたギニューを見る。

「俺様はドラゴンボールを持っていく。お前たちはこいつらの相手をしていろ！」
ギニューは超能力でドラゴンボールを自分の周りに浮かせ、フリーザの宇宙船へと運搬する。

残った特戦隊のメンバーが、キャロットと戦闘を始めた。

9. フリーザ

「なんだこいつ!? 俺たち四人が束になっても勝てないだなんて!」

ギニュー特戦隊のジース、グルド、バータ、リクームは怯え始めていた。

「なに? もう終わりなの?」

四人相手に圧勝したキャラルロツトが拍子抜けしている。

「この人、強いですね、クリリンさん?」

グルドがギニューに通信を入れた。

「ギニュー隊長! 戻ってきて下さい!」

そして、ギニューが戻ってくる。

「なるほど貴様強そうだな」

キャラルロツトとギニューが浮かび上がる。

二人の戦闘が始まった。

ポポーン。

ババーン。

目にも留まらぬ動きで壮絶な戦いを繰り広げる二人。

「俺は嬉しいぞ。貴様のような強い体の持ち主に会えたのだから」

「キヤルロット、やつの技に気をつけるんだ！」

と、下方でギニユーの姿をしたベジータが叫ぶ。

「あんた、どうやってベジータと？」

「いいだろう。見せてやる」

ギニユーは両手を横に広げる。

「チエーンジ！」

不思議な光線が放たれる。

「しめた！」

ベジータ自らが光線を浴びに躍り出た。

光線はベジータに当たり、二人の精神が入れ替わった。

「ベジータ、貴様！」

元の体に戻ったギニユーは、「今回は特別に見逃してやる」と、どこかへと去っていく。

「隊長、待って下さい！」

特戦隊の四人が後を追った。

五人が向かったのは、フリーザの元だった。

「それで？ 尻尾巻いて逃げ帰ってきたということですか」

眉間に青筋を立てるフリーザ。

「いいでしょう。そのサイヤ人には私自らがお仕置きをして差し上げることになりましたよ」

フリーザはスカウターを頼りに、キヤルロットの元へ向かう。

キヤルロットはフリーザの気配に気づいた。

(これがフリーザ……)

「ホッホッホ、あなたが最強のサイヤ人ですか」

「あんたがフリーザ？ 思ったより弱そうね」

「そう言っただけいられるのも今のうちですよ」

キヤルロットはフリーザの懐に潜った。

「……!?!」

驚くフリーザをよそに、拳をその鳩尾にめり込ませる。

「ぐおー!」

フリーザは体をくの字に曲げて痛そうな顔をする。

「はー!」

キヤルロットがフリーザの側頭部に蹴りを入れ、その体を真横へ吹っ飛ばした。

吹っ飛ばされたフリーザが岩壁にめり込む。

「ふっふっふ、いいでしょう。私の本気を見せてあげます」

フリーザは別の姿に変身した。

フリーザ第二形態。

「へえ。あんたも変身できるの?」

「なに?」

キヤルロットは気を溜める。

「はああああ……!」

黒髪が逆立ち、金色に染まり始める。

「なに!?!」

キヤルロットは超サイヤ人へと変貌した。

「待っていたぞ!」

ギニューが現れる。

「これはこれはギニューさん」

「きええええ!」

離れたところからグルドが超能力でキヤルロットの動きを封じる。

「な!?!」

「チエーンジ!」

不思議な光線を浴びたキャルロツトが、ギニューと入れ替わってしまった。

「だ、ダメだ。もうおしまいだ……」

怯えてプルプル震え始めるベジータ。

「え？」

「貴様の最強の体はもらった！」

だが。

「うん？」

超サイヤ人だったキャルロツトの髪が元の黒色に戻ってしまった。

「どうやら、力を使いこなせないみたいね」

戸惑っているギニューの懐に潜り、拳を乱打した。

「ぐおー！」

削られていくギニューの体力。

「おのれー！」

ギニューが光線を放った。その矛先はベジータ。

「……！」

キャルロツトは光線に飛び込んだ。

二人の体が元に戻る。

「くそ！ 今度こそ！」

ギニューがベジータの体と入れ替わろうとする。

「させないよ！」

キヤルロットは地面のカエルを掴み取ると、ベジータの前に投げ飛ばした。

「な!？」

ギニューはカエルと入れ替わってしまった。

「ゲロゲロ！」

ギニューになったカエルがどこかへと飛んでいく。

「おい、私のことは無視か？」

振り返るキヤルロット。

目の前には先ほどより大きな体のフリーザがいた。

「ふん！」

キヤルロットを殴り飛ばし、先回りして拳を乱打する。

「ぐあ！ があ！」

怯むキヤルロット。

「くたばれ！ この死に損ないが！」

キヤルロットはフリーザの渾身の一撃をかわす。

「なに!？」

距離を取り、超サイヤ人へと変身する。

「波——！」

キャロットがフリーザに光線を放った。

光線はフリーザに当たって爆発を起こす。

砂塵が消えると、傷だらけではあるが、大してダメージを受けていないフリーザが立っていた。

「貴様の力はその程度か？」

フリーザは更なる変身を始める。

10. フリーザの最期

フリーザが第三形態に変身する。

「フツフツフ、こうなってしまうえば、お前はもうおしまいだ。本気を出す前に倒してあげますよ」

「本気?」

「ええ」

「本気のあなたと戦ってみたいわね」

フリーザが猛スピードでキヤルロットに迫る。

キヤルロットはフリーザの攻撃をいなし、カウンターを浴びせる。

「ぐー」

怯むフリーザ。

追い討ちの蹴り。

「うおわー」

フリーザはバランスを崩して倒れる。

キヤルロットは地面に伏したフリーザを蹴り転がす。

「あなた、やりますね。少々癩かんに障りますよ！」

フリーザは眉間に青筋を立てながら最終形態に変身する。

「あなたには本気を見せてあげます。後悔しても知りませんからね」

フリーザがキヤルロツトの懐に潜る。

キヤルロツトはフリーザに拳を腹部にねじ込まれ、くの字に折れ曲がつて吹っ飛ぶ。

岩壁にめり込むキヤルロツト。

「やつとまともになつたわね」

「なんですつて？」

キヤルロツトは一瞬でフリーザの懐に潜り、拳を腹部にお見舞いする。

「ぐおえー！」

吐血するフリーザ。

キヤルロツトはフリーザを乱打し、遠くへ吹っ飛ばして光線を放った。

フリーザは間一髪のところまで光線をかわした。

「貴様、いったい何者だ!？」

「ただのサイヤ人、らしい」

「貴様、超スーパーサイヤ人なのか？」

「フリーザ、今のあんたじゃ私には勝てないわ。早々にこの星を去りなさい？」

「うるさい！ 黙れ！ こんな星、貴様もろとも破壊してやる！」

フリーザが特大の気弾を作り、地面に向かって投げつけた。

気弾は地面にぶつかると、そのままめりめりとめり込んで地上に大穴を開けた。すると、大地が揺れ、地中からマグマが噴出し始める。

「ベジータ、他の人たちを連れてこの星から逃げて！」

「お前はどうするんだ？」

「私は、フリーザを倒してからなんとかするわ」

「わかった。勝てよ」

ベジータは悟飯たちを見る。

「お前たち、ここはやつに任せて、この星を出るぞ！」

「あ……ああ……」

「だけど、この星の人たち全員を脱出させるのなんて無理ですよ」

「バカが！ ドラゴンボールがあるだろう？」

「そうか！ 神龍（シエンロン）でナメック星人たちを地球に移動させればいいんだ！」

「それじゃあ、僕が神龍を呼びます」

デンデがドラゴンボールの元へ飛び立つ。

「そんなことは許しませんよ！」

フリーザがデンデに気弾を投げようとするが、キヤルロットに回り込まれてしまう。

「いいでしょう。あなたを殺して、この星ごとみなさんに消えてもらいましょう」

「死ぬのは、あんただけよ！」

キヤルロットはフリーザを下方に叩きつける。

「ぐわー！」

フリーザはマグマに突っ込む直前で急停止した。

そして、キヤルロットの懐に潜って拳を乱打する。

キヤルロットは涼しい顔をしていた。

「おのれ、おのれ、おのれえええええ！」

フリーザの渾身の一撃をキヤルロットは右手で掴んで受け止める。

「往生際が悪いぞ」

その時、空が暗くなり、遠くに神龍が現れる。

「しまった！」

フリーザは神龍の元へ向かう。

「行かせない！」

キヤルロットはフリーザを追う。

フリーザは神龍の元に辿り着く。

キヤルロットは気円斬をかわす。

だが気円斬はブーメランのように戻ってきてキヤルロットの背後に迫る。

キヤルロットはフリーザの背後に一瞬で移動する。

「わかつているさ」

フリーザとキヤルロットがジャンプで気円斬をかわす。

キヤルロットはフリーザの前方に回り込んだ。

「あんた、もう諦めな」

フリーザの背後に気円斬が迫る。

「伏せて!」

「ふん! その手には……!?!」

フリーザの上半身と下半身が気円斬で真っ二つになる。

「ぐお!」

地に伏すフリーザ。

「たす……け……助けて……くれ」

「ふぎけないで! あんたはそうやって命乞いしたものを何人殺してきたの!?!」

キヤルロットはフリーザにエネルギーを分け与えた。

「私のエネルギーを分けてあげたわ。あんたならそれで助かるはず。あとは勝手にし

な」

キヤルロツトはポッドの元へ飛び立つ。

「ゆ……赦さん。お前は、この俺に、殺されるべきなんだああああ！」
フリーザの光線がキヤルロツトに迫る。

「馬鹿者！」

キヤルロツトの反撃がフリーザを襲う。

「やばい……！」

キヤルロツトはポッドに急いだ。

11. 乗っ取られたキャルロット

ポッドに乗り込んだキャルロットは、消滅寸前のナメツク星を脱出した。宇宙空間に飛び出した刹那、ナメツク星が完全に消滅した。

悟空が乗った宇宙船とすれ違う。

悟空は宇宙船の中からナメツク星を見ながら言う。

「星が消えちゃった」

一方、キャルロットの乗るポッドは。

「ん？」

キャルロットはポッドの燃料の残りを確認した。

燃料は残り少なく、途中で入れる必要があつた。

ポッドは近くの星に着陸した。

燃料を入手し、ポッドに給油する。

そこへ、灰色の赤ん坊が現れる。

「お前、すごいパワーを秘めている」

「ん？」

キヤルロットが振り返った瞬間、赤ん坊が飛びかかってきた。

赤ん坊はジェル状になり、キヤルロットの体内に侵入しようとする。

「ぐー！ なんだ!?!」

キヤルロットは苦痛に顔を歪めながら、赤ん坊の侵入を許してしまった。

ニヤリと笑みを浮かべるキヤルロット。

キヤルロットに侵入したのは、ツフル人が作った寄生生物ベビーだった。

「この体は私のものよ!」

「なに!?!」

キヤルロットは宙に舞い上がり、超サイヤ人となって気でベビーを体外へ押し出した。

ベビーが地面に転がる。

不敵に微笑むベビー。

「う!?!」

一瞬、キヤルロットの瞳が赤く染まった気がした。

キヤルロットは地上に降りる。

「お前、名はなんという?」

「キヤルロットです、ベビー様」

「ではキャルロット、お前のサイヤパワー、全て俺によこせ」
「はっ」

キャルロットは自身のエネルギーのほぼ全てをベビーに与えた。

ベビーはすすくと成長し、少年くらいの大きさになった。

「キャルロット、俺も地球とやらに連れて行け」

「ですが、このポッドは一人用です」

「ではもう一度、お前の体を貸してもらおうか」

ベビーはジェル状になりキャルロットの中に入り込んだ。

キャルロットはポッドに乗り飛び立った。

宇宙にポッドが飛び出すと、フリーザの宇宙船が近くに見えた。

(フリーザ……)

フリーザの宇宙船からビームが放たれ、ポッドが破壊される。

「なっ!」

粉碎されたポッドから、星の引力で地上へと落下していくキャルロット。

ベビーはキャルロットの体から飛び出し、フリーザの宇宙船に潜入した。

地上に落下するキャルロット。

そこに、医師が現れる。

「おやおや、怪我をしてるではありませんか」

「ここは？」

「ここは惑星ピタル。医療が盛んな星であります」

「治療してくれるの？ でも、お金ないですよ」

「構いませんよ。あなたは宇宙の帝王と呼ばれた悪名高いフリーザを倒されたので、特別サービスです」

「なぜそのことを知って？」

「先程、受け入れ要請があったのですよ。亡くなられたようですがね」

「そうなんですね。それより、手当を」

「ついてきて下さい」

キヤルロットは医師について行く。

通されたのは病院の診察室。

そこで医師の治療を受けるキヤルロット。

「ねえ、この星は定期便ってある？」

「もちろんですとも。ここから少し離れたところに、空港がございます」

「ありがとうございます」

治療を終え、病院を出るキヤルロット。向かう先は空港だ。

空港に着き、宇宙船に乗り込む。
宇宙船はピタルを発った。

12. 悟空帰る。地球はみんなオラの敵

地球にフリーザの宇宙船が着陸した。

コルド大王とメカフリーザが降りてくる。

「フリーザよ、ここがサイヤ人の仲間が住んでいる星か？」

「そうだよ、パパ」

「ふん。そのサイヤ人が戻ってくる前にそいつらを消してしまおうか」

二人の背後にベビーが現れる。

「そんなことはさせない」

「誰だ!？」

振り返るコルド大王とフリーザ。

「なんだ貴様は？」

「俺はツフル人だ。お前たちにこの星の人間どもを消されては困るのだよ」

「それはなぜだ？」

「なぜ？ この星のものどもを奴隷にするからだ。無論、お前たちも例外ではないぞ」

「貴様、この私をコルド大王と知っての狼藉ろうぜきか？」

「ふん」

ベビーがジェル状になってコルド大王に飛びかかった。

「ぬお!？」

「パパ！」

ベビーがコルド大王に浸透する。

「うわ！」

コルド大王はバランスを崩して倒れた。

「大丈夫？ パパ」

「……………」

コルド大王は無言で立ち上がる。

「大したことないな」

コルド大王の首がちぎれ、ベビーが飛び出してくる。

「貴様！」

「さて、お前はどうだ？」

ベビーがフリーザに侵入した。

「ぐ!？」

「こいつもか」

前屈したフリーザの背中からベビーがニルツと出てくる。
倒れるフリーザ。

（やはり狙うはサイヤ人）

ベビーは気を探った。

（西の都に強い気を感じる）

ベビーは西の都に移動した。

ここではベジータたちが休息を取っていた。

「ん？」

ベジータが邪悪な気に気づく。

「気をつけろ、お前たち！」

ベビーがベジータの前に降りてくる。

「何者だ!？」

「お前、サイヤ人だな？」

「なに？」

「お前の体、いただくぞ」

「なにを言ってる？」

ベビーはベジータに侵入する。

「ベジーター！」

クリリンの声に振り返るベジータ。

「お前も俺のシモベになれ」

ベジータの体からベビーが飛び出し、次はクリリンへと寄生する。

ベビーは地球にいるものに次々と寄生を繰り返し、ついには全員を下僕へと変えてしまった。

そんなカオスと化した地球に、悟空を乗せた宇宙船が帰還した。

「あり？　なんでみんな迎えてくれねえんだ？」

「出迎えてほしかったのか、カカロット？」

と、ベジータが現れる。

「ベジーター！　なんでおめえがここに？」

「ナメック星の神龍で移動してきたんだ。それより」

ベジータが徐に悟空へ歩み寄る。

「ふん！」

ベジータの拳が悟空の腹部にねじ込まれた。

「ぐおえ！」

（一瞬だが、ベジータの中に別の気を感じた）

悟空は体勢を整え、ベジータの方を向いた。

「おめえ、ベジータじゃねえな」

「ふ、お見通しか」

ベジータの中からベビーが現れる。

「お前の方が強そうだ。その体、いただくぞ」

「何？」

ベビーがジェル状なる瞬間、悟空が気弾でベビーを攻撃した。

「ぐわー！」

バラバラになって飛び散るベビーの細胞。

ベビーの細胞は一箇所に集まり、元の姿に戻る。

「お前を手下にするのはやめだ」

ベビーが悟空に接近し、攻撃をする。

悟空は攻撃をガードし、隙あらば反撃してベビーを怯ませた。

そこへ、クリリンと悟飯がやってくる。

「お父さん！ 手伝いにきましたー！」

「来るんじゃない！ 悟飯、クリリン！」

ベビーの横に着地する悟飯とクリリン。

クリリンが悟空に気弾を放つ。

悟空は迫る気弾を弾いた。

「誰を、とは言わなかったな」

「クリリン、どういふつもりだよ？」

「この二人は俺に従ってくれるそうだ。そうだよな？」

「はい」

「なんだと？」

「二人とも、悟空を殺せ」

「はい！」

悟飯とクリリンが悟空へと迫る。

悟空は気合で二人を吹っ飛ばして気絶させた。

ベジータが起き上がり、ベビーの元へ移動する。

「ベジータ、おめえもなんか？」

「ふん！」

ベジータが悟空に気弾を放った。

悟空は気弾を弾く。

「ベジータ、やつを殺せ」

「かしこまりました、ベビー様」
ベジータが悟空へと迫る。

13. 怒涛の反撃

悟空とベジータの戦いが始まった。

差は歴然だった。

ナメック星へ向かう宇宙船の中で修行をしていた悟空は、ベジータの上をいつていたのだ。

「ぐ……！」

圧倒的なパワーで追い詰められるベジータ。

「なにをしている、ベジータ？」

「申し訳ありません、ベビー様。カカロットがあまりにも強いので」

「ほおう？」

「ベビーつちゆうんか、おめえ。みんなを元に戻せ！」

「それはできない相談だ。俺の卵は絶対に取り除けない」

「卵だ？」

「俺は一度入った相手には必ず卵を産み付けている。その卵が孵り、脳まで達すれば、そいつは俺の思い通りに動く」

「いやな能力だな」

「全くその通りね」

と、キヤルロットが現れる。

「遅いぞ、キヤルロット!」

「申し訳ございません」

キヤルロットはベビーの背後に降りると、不意打ちの回し蹴りを浴びせた。

「ぐお!」

吹っ飛んでいくベビー。

「全く。正直焦ったわ。界王神様とキビトさんがいなかったらどうなってたか」

ことは三十分前。

地球に到着したキヤルロットは、ベビーの元へ向かうつもりだったが、界王神を名乗る者とその付き人であるキビトに囲まれ、行手を阻まれたのだ。

「なに、あなたたち?」

界王神は小瓶に入った不思議な液体、ちよつしんすい超神水をキヤルロットにふっかける。

「ぎゃー!」

苦痛に顔を歪めたキヤルロットの体から禍々しい霧のようなものが抜け出して消滅した。

「あ？ 動ける!？」

「キヤルロットさんですね。あなたのことは界王神界から拝見させてもらっていました」

「界王神界？」

「神の世界ですよ」

「……?？」

疑問符を浮かべるキヤルロット。

「おっと、こうしてはおれません。あの邪悪なベビーを倒して下さい」

「へビー?？」

「それは重量! へビーじゃなくて、ベビーです!」

「わかってるわよ。あいつには一泡吹かせたいからね」

「再び洗脳されないよう気をつけて下さい」

「大丈夫!」

キヤルロットはベビーの元へ飛んだ。

「あの子で大丈夫でしょうか?」

「キヤルロットさんなら大丈夫でしょう」

というわけで、現在。

「正気か貴様？」

「あんたに操られて生きて行くぐらいなら、死んだ方がマシよ」

「ほおう。そうかね。じゃあお望み通り殺してやる」

ベビーがキヤルロット目掛けて突進してきた。

キヤルロットはベビーの攻撃をかわす。

「死ぬのは、あんたの方だけどね！」

キヤルロットの光線がベビーを襲う。

ベビーは光線を潜ってキヤルロットの肉体を狙う。

キヤルロットはジェル状になったベビーをかわす。

「くっ！ その肉体、俺によこすのだ！」

「いやーだよー！」

「きいいいいー！」

怒り狂ったベビーが気弾を連射する。

キヤルロットは迫り来る無数の気弾をかわし、反撃のチャンスを探う。

(どうするか)

「取り押さえろ、ベジータ」

「はい！」

ベジータがキャラルロットを取り押さえる。

「しまった！」

ベビーがニヤリと笑み浮かべ、ジェル状になって接近してきた。

焦った表情を見せるキャラルロット。

「なんちゃって。対策済みです」

ジェル状のベビーが、キャラルロットに侵入する刹那、何かに弾かれて吹っ飛んだ。

「なんだ？ なにが起きた？」

「気のバリアよ。あんたに入られる瞬間に張らせてもらったのよ」

キャラルロットはベジータをベビーに向かって放り投げた。

ベビーはベジータをかわす。

キャラルロットは静かに気を溜め、超サイヤ人に変身した。

「さて、反撃といきますか」

キャラルロットはベビーの懐に潜った。

14. ベビー昇天。未来からの訪問者現る

ベビーの腹部に拳が埋まり、くの字に曲がって吹っ飛んでいく。

「ぐー！」

岩壁にめり込むベビー。

(その体、まさに俺に相應しい肉体だ)

ベビーは再びキヤルロットを乗っ取ろうと、そのチャンスを窺う。

「かかつてこないの?」

キヤルロットは、ベビー目掛けて光線を放った。

ベビーは光線を潜ってキヤルロットに接近する。

「だから上げないって」

キヤルロットはジェル状になったベビーをかわした。

「おのれえええええ！」

無数の気弾がキヤルロットを襲う。

キヤルロットは無数の気弾をかわしながらベビーに接近して拳を腹部に埋めた。

「ぐおえー！」

ベビーはくの字に折れ曲がる。

キヤルロットはベビーを下方に叩き落とす。

ベビーは地面に墜落すると、フリーザの宇宙船を目指す。

(あんなやつ俺の手には負えん)

宇宙船に乗り込んだベビーは操縦室のパネルを操作する。

ベビーを乗せた宇宙船が、宇宙へと飛び立つ。

キヤルロットは光線を放った。

「気が、気が、サイヤ人の気が襲ってくるううううー！」

ベビーを乗せた宇宙船は、キヤルロットの光線によって太陽へと落下していく。

「うわああああー！」

ベビーは悲鳴を上げながら、太陽へと吸い込まれて消滅するのだった。

主人を失い、放心する下僕たち。

界王神が、ベビーに洗脳された人々を、超神水で元に戻す。

キビトがベビーを倒したキヤルロットの元へやってくる。

「キヤルロットさん、あなたのおかげで宇宙は救われました」

「まさか、ツフル人があんな邪悪な生命体を生み出していたなんて」

と、界王神が現れる。

「誰だおめえ？」

と、悟空。

「貴様、界王神様に向かってなんたる口の利き方だ？」

「構いませんよ、キビト」

「はい」

「それにしても、十五年でしょうか。あなたは立派に大きくなられた」

「そういえば、そんなに経ってるのね。久しぶりだね、二人とも」

「なあ、そいつら知り合いなんか？」

キヤルロットが悟空を見る。

「この方達は神様よ」

「神様だ？」

「うん。あの世に界王星つてのがあるんだけど。そこに住む界王様より偉い方々なの

よ」

「なんだつて？ こんなちんちくりんがああ界王様よりねえ」

界王神の額に青筋が浮かぶ。

「ちんちくりん？」

「貴様、無礼だぞ！」

「全くです。こんな常識のない地球人がいるなんて」

「オラ、サイヤ人だ」

「い？」

「一応、これでも私の兄なんだけど」

「キヤルロツトさんのお兄様でしたか。これは失礼しました」

「そうかしこ畏かしこまられてもオラどうしたらいいかわかんねえぞ」

「それじゃあ、我々はこれで」

界王神とキビトは姿を消した。

そこに、せいはい青髪はつの青年が現れる。

「こんにちは」

振り返るキヤルロツトたち。

「誰？」

「あなたが悟空さん、ですね？」

「オラ？」

「はい。ちよつと、僕と一緒にこちらへ」

青年と悟空は皆から離れたところへ移動する。

「悟空さん、すみませんが、超サイヤ人になつてもらえませんか？」

「超サイヤ人？　なんだそれ？」

「あれ？　フリーザを倒したの、あなたですよね？」

「フリーザ？　オラ、そんなやつ知らねえぞ」

「え？」

困った顔をする青年。

(伝え聞いている歴史と全然違うな)

「驚かず聞いて下さい。今から三年後、人造人間が現れ、地球がメチャクチャになります。あなたにはそれを阻止してもらいたいです」

「人造人間？」

「レッドリボン軍が二人の人間をマシンに改造して放つのが、十七号と十八号です。実は俺は未来から来たのですが、俺のいた時代はそいつらのせいでメチャメチャになってしまい……」

「未来から？」

「ええ。あ、このことは他言は無用です。俺という存在が消えかねない。とにかく、やつらを倒してほしいんです」

青年は懐からホイホイカプセルを取り出す。

「おめえ、これをどこで？」

「ああ。俺はあそこにいるベジータさんの息子なんです」

「ベジータの息子？」

「はい。母親はブルマって言います」

「なんだって？」

「悟空さん、近い将来、あなたはウイルス性の心臓病で倒れます。これはその薬です。症状が出たらこれを飲んで下さい」

青年が悟空にホイホイカプセルから薬を出して渡した。

「俺はトランクス。三年後にまた来ます」

トランクスと名乗る青年はそう言っ去っていった。

15. 覚醒せよ！超サイヤ人！

キヤルロットは、パオズ山の悟空の家に来てきた。

「おう。来たか、キヤルロット」

「兄さん、超サイヤ人になりたいの？」

「ああ。オラ、もつともつと強くなって、地球を守りてえ」

「そっか。じゃあ、特訓だね」

「それじゃあ、天界の精神と時の部屋行くか」

「天界？ それどこにあるの？」

「あっちの方だ」

キヤルロットは気を探る。

（強い戦闘力を二つ感じる。一つはデンデか）

「兄さん、私に掴まって」

「掴まってどうすんだ？」

「瞬間移動よ」

「瞬間移動？」

「ベビーに操られてる時、ヤードラット屋つてところで教わったわ」

悟空がキヤルロットの肩に手を置く。

キヤルロットは額に指を当てて意識を集中し、悟空と共に天界へと瞬間移動した。

「うわあ!」

いきなり眼前に出現した二人にデンデが驚いて尻餅をついた。

「キヤルロットさん! と、こっちは?」

「オラとは初めてだったな。孫 悟空つてんだ。キヤルロットの兄ちゃんだ」

「もしかして、悟飯さんの?」

「ああ、そうだ」

悟空の肯定の後、キヤルロットが口を開く。

「私たち、精神と時の部屋? つてのを使いたいんだ」

「精神と時の部屋ですか。どうぞ、ご自由に使ってください」

「ありがとな」

と、悟空。

キヤルロットと悟空は精神と時の部屋へと入った。

「……!?!」

「重いだろ?」

「そうね」

「最初入った時、オラもそうだった」

「まあ、動けなくはないわね。慣れれば普通に動けるかも」

キヤルロツトは果てしなく続く白銀世界の中で体を鳴らすために入口の周辺をマラソンで数周する。

「こんなところか」

キヤルロツトと悟空は向き合う。

そして、本気の戦いを始めた。

互いに乱打し合い、隙を突かれたキヤルロツトの顔に悟空の拳がめり込む。

「ぐわー！」

吹っ飛んで地面に転がるキヤルロツト。

「今のはちよつと効いたわ」

「なあ、おめえ超サイヤ人になつてくれねえか？」

「いいの？ 火傷じゃ済まないかもよ」

「超サイヤ人に界王拳で対抗してみる」

「……そう」

キヤルロツトは静かに気を溜め、超サイヤ人に変身する。

「界王拳!」

悟空は界王拳を発動し、目にも留まらぬ速さでキャルロツトの懐に潜って拳を突き出す。

が、キャルロツトは微動だせず、反撃して悟空を吹っ飛ばした。

「うえあ!」

悟空が地面に転がる。

「強えな。流石、超サイヤ人。だけんど……」

立ち上がる悟空。

「一〇〇倍だ——っ!」

悟空はパワーをアップさせてキャルロツトを攻撃する。

キャルロツトは涼しい顔で、悟空の攻撃を耐える。

「ほれ」

ワンパンで悟空を吹っ飛ばした。

地面に転がる悟空。

「くそ! 全く歯が立たねえ!」

「超サイヤ人には怒りが必要よ。大切な者が殺されたところを思い浮かべて」

悟空は、親友のクリリンが、何者かに殺される瞬間をイメージした。

プチン！

悟空の髪質に変化が起こる。

毛根から段々を黄金に染まり始め、最終的には超サイヤ人へと変貌した。

「やったよ兄さん！ それが超サイヤ人だよ！」

「力が満ち溢れてくる……、これが超サイヤ人……!?!」

「そのまま行くよ！」

キヤルロットが悟空に迫る。

悟空はキヤルロットの攻撃をかわし、その顔面のぶん殴って吹っ飛ばし、追撃の乱打を浴びせ、かめはめ波を放った。

「……!?!」

悟空の暴走に気づいたキヤルロットは光線をかわし、連続エネルギー弾をぶつ放して彼の体力を減らしていく。

「兄さん、目を覚まして！」

キヤルロットが巨大なエネルギーボールを作り出して悟空に投げ飛ばした。

「ぐわー！」

爆煙に包まれた悟空は超化が解けて地面に倒れた。

16. セル登場

ベッドの上で目を覚ます悟空。

「あれ？ オラ、いったい……」

「あ……、気がついた？ 兄さん、超サイヤ人の力に負けて暴走してたんだよ」
「すまねえ」

「変身の仕方はわかったよな？」

「ああ。だけど、理性を保てないんじゃないやあなあ」

「超サイヤ人は興奮しやすいからね。興奮状態を抑えられれば保てるかもね」

キヤルロツトは入り口へと向かう。

「後はあなた一人でなんとかするのよ」

「ああ」

キヤルロツトは精神と時の部屋を出た。

そこへポポがやってくる。

「ちようどよかった。今、呼びに行こうと思ってた」

「なに？」

「北の都、とんでもないことになっている」

「まさか、人造人間が？」

「すぐに行つてくれ」

「わかつた！」

キヤルロツトは氣を探る。

「氣を探つても無駄。人造人間、氣を持たない」

舌打ちしたキヤルロツトが天界を飛び出し、空路で北の都へ。

しかし、キヤルロツトが北の都に着いた時には、もうすでに荒れ果てていた。

地上に三人の人影が見える。

キヤルロツトは物陰に隠れながら三人の人影に接近した。

「誰だ？」

と、黒髪の男が言う。

(氣づかれたか)

仕方なく姿を見せるキヤルロツト。

金髪の女は言った。

「孫 悟空ではないようね」

「キヤルロツト。超^{スーパー}サイヤ人だ」

「超？　なんだかよくわかんないけど、あの世へ送ってやろう」

男が高速で接近してきた。

キヤルロットはギリギリのところでかわし、反撃する。

「ぐー！」

項うなじにキックを当てて吹っ飛ばすキヤルロット。

「やるなあ、お前」

男が接近し、拳をキヤルロットの腹部に埋めた。

「ぐえー！」

キヤルロットがくの字に折れ曲がると、そこに上部からの追撃が。

「ぐおー！」

キヤルロットは地面に叩きつけられた。

「このまま押し切ろうと思ったけど、やっぱ無理か」

立ち上がったキヤルロットを気を溜める。

「はああああー！」

黄金のオーラを纏い、稲妻を放ち、超サイヤ人に変身するキヤルロット。

刹那、姿が消え、次の瞬間には男の腹部に風穴が開いていた。

「ぐー！」

「十七号！」

「貴様……」

と、黄緑色の服を着た男が、キヤルロツトの顔面を掴み、地面に叩きつけた。

「ぐ！」

「十六号、悪いんだけど、私にやらせてよ」

「いいだろう」

金髪の女がキヤルロツトの前に立つ。

立ち上がるキヤルロツト。

「あんだ、強いんだね」

目にも留まらぬ速度で接近戦を始める二人。

攻撃音だけが辺りに木霊こだまする。

やがて、動きを止めた二人が出現する。

キヤルロツトの方はボロボロだった。

「あんだ、降参しなよ。命までは取らないから」

「へ！ 私はあんなたちを全員やつつけるまで、絶対に引き下がらないわ」

「そう。じゃあ、死にな！」

刹那、十七号が悲鳴を上げた。

悲鳴のした先を見ると、緑色の怪物が十七号を拘束していた。

「誰？」

「感謝するぞ、そのサイヤ人」

怪物は尖った尻尾の先を展開し、そこから十七号を吸い込んでしまう。姿を変える怪物。

「十七号!!」

「ふはははは！ 十八号、お前も俺の一部となるのだ！」

怪物が金髪の女、もとい十八号に接近し、尻尾で吸い込もうとするが。

「危ない！」

キヤルロツトが十八号を突き飛ばして庇った。

怪物の尻尾がキヤルロツトの頭に覆いかぶさった。

「違う！ お前じゃない！」

キヤルロツトから尻尾を離し、その体を吹っ飛ばした。

地面に転がるキヤルロツト。

「お前、何者なのよ？」

「私の名はセル。今日のところは退散するが、十八号、私は必ずお前を手に入れてみせる」

緑の怪物セルはそう言つて、飛び立ってしまった。

「十七号のことは残念だったけど、あんたのおかげで助かったよ
じゃあね——と、十八号は十六号を連れて去っていく。」

そこへ、ベジータが現れる。

「おい、今ここで妙な戦闘力を感じたが……」

「セルとか言つてたね。逃げたけど」

「そいつは強いのか？」

「知らない」

「まあいい。どんなやつが現れようと、俺が倒してやる」

「随分と自信過剰なのね」

「フン！ ほざいてろ」

ベジータは去つていった。その表情は、自信に満ち溢れていたという。

17. キャルロットが心臓病?超サイヤ人になったベジータ!

西の都。

ドクターゲロと人造人間十九号が暴れている。

辺りは荒廃していた。

そこへ、クリリンやピッコロたちが様子を見に集まってくる。

すると、キャルロットが姿を現し、超サイヤ人となって十九号と戦い始めた。

最初はキャルロットの優勢だったが、十九号のエネルギー吸収で追い詰められ、ついには超化が解ける。

更に、胸の苦しみが襲い掛かり、息が上がってしまふ。

悟飯は気づいた。

「キャルロットさん、心臓病なんじゃ!?!」

「待て。やつの話では悟空がかかるんじゃないやなかったのか!?!」

キャルロットは倒れ、その隙にエネルギーを吸われる。

辛そうな表情のキャルロット。

そこに何者かが現れ、十九号を蹴り飛ばした。
現れたのはベジータだった。

「キャルロットはやらせん」

ベジータは超サイヤ人に変身した。

「……！」

驚くキャルロット。

「ベジータ、あんた……」

「超サイヤ人は極限まで鍛え上げ、怒ることに変身が可能であるとわかってな」

十九号を乱打するベジータ。

敵はボロボロになり、怯え始めた。

「ガラクタ人形も恐怖を感じるのだな」

ベジータが宙に浮き上がり、手の平を突き出した。

この場から逃げたい一心で走り去ろうとする十九号だが。

「くらうがいい。こいつが超ベジータの、ビッグバンアタックだあ！」

ベジータの究極奥義が十九号を襲う。

「ぎよええええ！」

十九号の胴体が倒れ、頭がもぎ取れた。

「十九号!」

「ふん!」

ベジータが十九号の頭を踏み潰して粉砕した。

「お……お……おのれ!」

逃げ出すドクターゲロ。

そこへみんながやってくる。

「悟飯、キャロットに薬を飲ませるんだ。カカロットの家で保管しているんだろう?」

「はい!」

悟飯がキャロットをパオズ山へ運ぶ。

ベッドに寝かされるキャロット。

「キャロットさん、これを」

キャロットは黙って薬を飲んだ。

「これで治るといいけど」

「悟飯ちゃん、この子一体誰なんだべか」

「お父さんの妹ですよ、お母さん」

「悟空さは何人家族なんだべか?」

月日は流れ、一週間後には、キャロットもすっかり元気になっていた。

彼女が寝込んでいる間、セルは十八号の吸収に成功していた。

セルは荒野地帯に武舞台を作成し、セルゲームの開催を宣言した。

自分と戦うものを募り、誰も勝てるものがないかつた場合は、地球を破壊すると言っていた。

キヤルロットは寝込んでいて鈍った体を鍛え直すため、セルゲームに参加することにした。決めるのだった。

また、悟空もセルと戦ってみたいらしく、セルゲームに参加することにしたのだが。

18. キャロットよ、死んでしまうとは情けない

武舞台。

「誰かと思えば貴様か、キャロット」

「セル、ここがあんたの墓場よ」

「面白い。やってみるか」

両者の姿が消える。

目にも留まらぬ速度でお互いの拳がぶつかり合う。

「ぐお！」

怯むセル。

「もつと本気を出しなさいよ」

「ふん。いいだろう」

再び二人の姿が消える。

「うが！」

キャロットがセルに押され始める。

「どうした？ お得意の超サイヤ人にはならないのか？」

「ノーマルで倒そうと思ったけど、無理があつたみたいね」

「私も甘く見られたものだな」

「はあああああ！」

気を解放し、超サイヤ人に変身するキヤルロット。

「そうでなくちやな」

一瞬の出来事だった。

セルの腹部に、キヤルロットの拳が埋まる。

「ぐおえー！」

セルはくの字に折れ曲がり、よろめく。

「ふんー！」

キヤルロットの追撃が、セルを地面に叩きつける。

「ぐはー！」

吐血するセル。

「お、おのれえー！」

セルは立ち上がり、キヤルロットに足払いをかけようとするが、飛び上がってかわされる。

キヤルロットは空へ舞い上がり、光線を撃とうと構えた。

そこにセルに似た複数の青い小さなソレが現れる。

セルジュニアだった。

セルジュニアがキャルロットに飛びついた。

まとりつつかれ、身動きが取れないキャルロット。

「フハハハハ！」

セルが笑い声を上げると、セルジュニアたちに異変が起こった。

「な!?!」

次の瞬間、セルジュニアたちが爆発を起こし、気がつくときャルロットは見知らぬ世界にいた。

角を生やしたメガネの男が、火の玉のようなものを案内している。

「どい?」

「来てしまったか、キャルロット」

赤い顔の大男が、キャルロットに声をかける。

「誰?」

「わしはこのあの世を管理する閻魔大王だ」
えんまだいおう

「あの世?」

「お前はセルジュニアの爆発に巻き込まれ死んだのだ」

「ちよつと待つて。私が死んだ？」

「お前さんは天国行きじゃ」

そこへ年老いたナメック星人が現れる。

「お待ち下さい、閻魔大王様。彼女には界王の元へ行かせるのが相応しいかと」

「誰だお前は？」

「地球の神です」

「界王の元へか……」

「界王に稽古をつけてもらつて、地球へ行かせるのです。セルを倒せるのは最早、キヤルロツトしかないかと」

「しかし、そんなことしてる合間に地球は滅びてしまうやもしれんぞ？」

「その場合はナメック星のドラゴンボールで……」

「よしわかった。そこまで言うのであればよかろう」

キヤルロツトを見つめる閻魔大王。

「キヤルロツト、お前の行き先は界王の元に変わつた。あの蛇の道の尻尾を目指していくがよい」

「はあ。……？」

「くれぐれも、黄色い雲の下には落ちるなよ」

キャルロットは蛇の道を進み出した。

(これ、走る必要ないよね)

キャルロットは舞空術で尻尾に向かってひとつ飛びする。

「お？」

尻尾はすぐに見えてきた。

「ここが尻尾だけど、こんなところに界王様がいるのかしら？」

頭上に界王星があるのに気づく。

「界王星？」

キャルロットは飛び上がった。

界王星に着地するキャルロット。

「うん？ 誰じゃ？」

黒服を着た男がキャルロットに訊ねる。

「あなたが、界王様？」

「そうじゃ。いかにもわしが界王じゃ。で？ お前さん、何用でここへ来なされた？」

「稽古をつけてほしいんです」

「それは武術の稽古か？」

「よくお分かりで」

「よかろう。お前さんに稽古をつけてやろう」
かくて、キヤルロットの稽古が始まった。

19. 帰ってきたキャロット セルの消滅

キャロットが死んで一日が経とうとしていた。

セルの暴挙は、悟空たちが必死に食い止めている。

「キャロット、お前さん、フリーザを倒したそうじゃな？」

「ええ、まあ」

「どうれ。超サイヤ人というのを見せてはくれんか？」

「超サイヤ人ね。いいよ」

キャロットが気を開放すると、髪が金色に輝き始めた。

（こ、こいつは凄い。悟空に教えた界王拳、重ねたらどうなるかの）

「お主、界王拳に興味はないか？」

「界王拳？」

「そうじゃ。悟空にも教えたんじゃがな、超サイヤ人に界王拳を乗せたらどうなるのか

と思つての」

「それでセルを？」

「倒せるはずじゃ、セルだけに」

界王は笑い出した。

「界王様、寒いですよ」

更に半日、キヤルロツトは界王のトレーニングを受け、界王拳を習得した。

「おーい」

水晶玉に乗った老婆が現れる。

「占いオババじゃ」

「お主を一日だけ地上に下ろしてやる」

「その間にセルを倒してこい」

キヤルロツトは占いオババと共に地球に降り立つ。

「私が案内できるのはここまでじゃ」

「構わないわ」

「その状態でもう一度死ぬと消滅してしまうからのう。絶対に死ぬんじゃないぞ」

「わかった」

キヤルロツトはそう答えると、セルの元へと飛び立った。

「うん？」

セルはキヤルロツトの戦闘力に気づく。

「生きていたのか!？」

「いや、死んでるわ。けど、本当に死ぬのはあんたを倒してからよ！」

「この私を倒す、だど？ 笑わせるな」

キャロットが辺りを見渡すと、多くのものが地に臥ふしていた。

「はああああ！」

キャロットは気を解放して超サイヤ人に変身する。

刹那、キャロットの姿が消え、セルの腹部に彼女の拳が埋まった。

「ぐえー！」

くの字に折れ曲がり、吹っ飛んでいくセル。

「絶望というものを味わわせてあげるわ」

界王拳発動。

キャロットは吹っ飛ぶセルを追尾し、上部から殴り落とし、地上に先回りして落下してきたセルの背中を片手で受け止めた。

「ぐはー！」

吐血するセル。

「ふんー！」

キャロットはセルを放り投げた。

セルは身動きが取れないでいた。

キヤルロットはセルに向けて手の平を突き出した。

「や、やめて……くれ……」

キヤルロットは無言を回答に、セルに向かつて気功波を放った。

「ぐおおおー！」

セルは悲鳴を上げながら消滅した。

同時に、17号と18号が投げ出される。

「う……」

17号がキヤルロットを見る。

「あんたが俺たちを？」

続いて18号も顔を上げた。

「へえ。強いんだね、あんた」

「おい、その輪つかはなんだ？」

17号はキヤルロットの頭の輪を見て言った。

「私、死んじやったのよ」

「そうか」

「それじゃ、行くわね」

キヤルロットはそう言うと、占いオババの元へ向かう。

「無事にセルを倒したようじゃな」

「界王拳使ったら一瞬だった」

「全く、サイヤ人には驚かされるわい。さて、戻るとするかのう」

キャロットは占いオババと共にあの世に戻るのであった。

20. あの世一武道会

キヤルロットがセルを倒し、十年の歳月が経っていた。

悟空の息子、悟飯が、サタンシティーのオレンジスターハイスクールに通っていた。

今日は高校の初登校日。学校へ向かう途中、街中で銀行強盗と警察官隊の抗争を目撃した。

「あれは……」

悟飯は物陰に着地して隠れて様子を窺う。

「ちよつとあなたたち！」

端正な顔立ちをしたツインテールの女の子が強盗の前に躍り出た。

（なんだあの子？ 危ないじゃないか。助けなきや）

そう思った刹那、女の子は強盗を一瞬で叩きのめした。

「い……!?!」

悟飯は驚いた。

「ご協力感謝しますー!」

警察官隊が敬礼をした。

女の子は去っていった。

悟飯は舞空術で高校に向かう。

一方、キヤルロットは、あの世一武道会会場の最終ステージでパイクーハンと戦っていた。

お互いの拳がぶつかり合い、なかなか勝負がつかないでいる。

「なかなかやるわね」

「お前もな」

「けど、まだ本気じゃないんだからね」

「なに？」

キヤルロットは気を溜めた。

「はあああああ！」

気が解放され、超サイヤ人へと変貌する。

「な、なんだその姿は？」

「超サイヤ人よ」

「超サイヤ人？」

「知らなくても結構。あんたは負けて、私が優勝なんだから」

キヤルロットはそういうと、一瞬でパイクーハンの懐に潜り込んで拳を腹部に押し込

んだ。

「ぐおえー！」

パイカーハンは吐血して落下した。

「とどめよー！」

キヤルロットが武舞台に倒れるパイカーハン目掛けて気功波きこうはを放った。

パイカーハンは咄嗟に気功波をかわして背後を取る。

（な!?!）

キヤルロットはパイカーハンの回し蹴りをダックでかわし、振り返って蹴りを側頭部に叩き込む。

パイカーハンは勢いよく吹っ飛ぶが、場外ギリギリのところまで舞空術を使って静止した。

だが、界王拳を発動したキヤルロットが一瞬でパイカーハンの眼前に出現した。

「なに!?!」

パイカーハンはパンチをかわして飛び上がった。

不発に終わったキヤルロットは振り返り、パイカーハンを睨め付ける。

（超サイヤ人界王拳を見切られるなんて!）

キヤルロットは瞬間移動でパイカーハンの背後に回り込んだ。

「消えた？」

キヤルロットは両手を組んでパイカーハンを叩き落とした。

「うわああああ！」

パイカーハンは場外目掛けて落下していく。

（やばい！ 立て直せない！）

パイカーハンは場外に激突し、キヤルロットに敗れた。

「場外！ 優勝はキヤルロット選手です！」

と、審判。

キヤルロットはパイカーハンの前にゆっくりと降り立って手を差し伸べた。

パイカーハンはキヤルロットの手を取って立ち上がる。

「負けたのは悔しいが楽しかった。またやろう」

「そうね」

キヤルロットは優勝賞金を受け取ると、観戦していた界王と共に界王星へと戻った。